

2019. 11. 20

畑 啓之

大正一昭和一平成一令和の101年間を力強く走り抜けた中曽根康弘元首相逝く

中曽根康弘という名を知らない日本の高齢者はいない。日本の政治に大きな足跡を残した人物である。

衆議院議員連続20回当選(1947年 - 2003年)、科学技術庁長官(第7・25代)、運輸大臣(第38代)、防衛庁長官(第25代)、通商産業大臣(第34・35代)、行政管理庁長官(第45代)、内閣総理大臣(第71・72・73代)、自由民主党総務会長、自由民主党幹事長、自由民主党総裁(第11代)などを歴任した。

この中曽根氏が昨日亡くなられた。没年101歳。高齢化日本を代表する人でもあった。

さて、この中曽根氏は政治の世界だけではなく、俳句の世界でも取り上げられる機会が多かったようだ。本日の神戸新聞にも2句紹介されている。

神戸新聞 2019.11.30

正平調 自主憲法の制定を唱え、「憲法改正の歌」までつくった。それなのに国民はなかなか理解をしてくれない。なせだろう。中曽根康弘元首相がのちに振り返って「反省」したことがある◆官憲におびえ、戦争に苦しんだ国民が戦後、ようやく手に入れたもの―「この平和と自由だけは絶対に手放したくない」という切実な願いが日本人にはあった、そこに思いが至らなかつた(「自省録」より)◆かつては「青年将校」と呼ばれた改憲論者のしみじみとした言葉が心に残っている。先の戦中に弟を亡くし、出征したポルネオ島では部下たちを失った。その胸に何かしら、よぎるものがあつたのかもしれない◆俳句を愛した。〈この花を 母にそえたき あやめかな。衆院選で初当選した28歳のとき、亡き母の墓前にたむけたと。〉首相の座をついに射止めると、合はるけくも 来つるものかな 萩の原と詠んだ◆首相としては国鉄の民営化や日米の蜜月外交が記憶される。自らを「歴史法廷の被告人」だと語っていたように、政治家としての評価を後世に委ねての旅立ちである。中曽根さんがきのう101歳で亡くなった◆知られた句がある。〈暮れてなお命の限り 蟬しぐれ〉。気づけば、昭和の首相はだれもいなくなつた。 2019.11.30

Web 上には次のようなブログがあつた。中曽根の俳句を上手、あるいは心に響くとは言っていないが、その存在に注目を置いていることは確かである。

齋藤百鬼の俳句閑日 政治家の俳句 2007年01月21日 より

<https://blog.goo.ne.jp/kojirou0814/e/7f07c4f0c282a05e554432cf078fa881>

俳句なんてものは上手い下手は別にして誰にでも作れる。政治家はどうだろうか。

ここに志摩芳次郎の「俳句をダメにした俳人たち」という痛快な本がある。そのなかに「うそつき俳人・中曽根康弘」がある。

中曽根さんの句である。

亡き父母を呼びかひ鳴くや蝉時雨 康弘
炎天へ霊火噴き立ち原爆忌

「中曽根さまの俳句である。器用だけで、心がこもっていない。そんな感じを受ける。蝉時雨を鳴くというのは拙劣。蝉時雨は蝉が振るに鳴くことをいう。霊火噴き立ちは、おかしい。噴水ではないのだ。首相をしりぞいたこれからの中曽根さまの俳句に注目したい」

中曽根氏は俳句を本業としていたわけではないが、3冊の著作をあらわしている。これらの著作は中曽根氏の多くの著作の一部であり、Wikipedia に示された「主な著作」のなかにはない。

人生 100 歳時代。人が情熱に突き動かされて何かを行い続けられれば、実りが生まれることを中曽根氏が「俳句」を実例として示した。60 歳、70 歳、いや 80 歳を超えても、常に心震わせることに挑み続ける、そんな時代が日本にも来ているものと思う。

中曽根康弘 (Wikipedia)

1918 年 (大正 7 年) 5 月 27 日生～2019 年 (令和元年) 11 月 29 日歿

主な著作

著書

『青年の理想』 (一洋社、1947 年)

『日本の主張』 (経済往来社、1954 年)

『南極』 (弘文堂、1963 年)

『日本のフロンティア』 (恒文社、1966 年)

『新しい保守の論理』 (講談社、1978 年)

『心のふれあう都市-21 世紀への提言-』 (サンケイ出版、1980 年)

『政治と人生-中曽根康弘回顧録』 (講談社、1992 年)

『天地有情-五十年の戦後政治を語る』 (文藝春秋、1996 年)



中曽根康弘句集 2008
中曽根 康弘 | 2008/10/1

単行本

こちらからもご購入いただけます
¥569 (6点の中古品)



中曽根康弘句集
中曽根 康弘 | 2000/9/1

単行本

こちらからもご購入いただけます
¥5,500 (2点の中古品)



中曽根康弘句集
中曽根 康弘 | 1985/7/1

単行本

こちらからもご購入いただけます
¥139 (13点の中古品)

『二十一世紀日本の国家戦略』（PHP 研究所、2000 年）

『自省録-歴史法廷の被告として』（新潮社、2004 年）

『日本の総理学』（PHP 新書、2004 年）

『保守の遺言』（角川書店 [角川 one テーマ 21 新書]、2010 年）

『わたしがリーダーシップについて語るなら』（ポプラ社、2010 年）

『中曽根康弘が語る戦後日本外交』（新潮社、2012 年）

『なかそね荘 賢人たちは激動の 10 年をどう見つめてきたのかー』（2015 年、世界文化社）

共著

（竹村健一編）『内閣総理大臣中曽根康弘、防衛・憲法を語る-亡国の非武装中立論を撃つ』（山手書房、1984 年）

（佐藤誠三郎・村上泰亮・西部邁）『共同研究「冷戦以後」』（文藝春秋、1992 年）

（梅原猛）『政治と哲学 日本人の新たなる使命を求めて』（PHP 研究所、1996 年）

（宮沢喜一）『対論改憲・護憲』（朝日新聞社、1997 年）

『憲法大論争 改憲 vs.護憲』（朝日文庫、2000 年）

（石原慎太郎）『永遠なれ、日本 元総理と都知事の語り合い』（PHP 研究所、2001 年/PHP 文庫、2003 年）

（竹村健一）『命の限り蝉しぐれ-日本政治に戦略的展開を-』（徳間書店、2003 年）

（木下義昭編）『戦後 60 年日本の針路を問う-世界日報 30 年の視点-』（世界日報社、2005 年）

（聞き手：松本健一）『政治は文化に奉仕する これからの政治と日本』（シアテレ新書、2010 年 7 月） - DHC シアターの番組での対話集

（梅原猛）『リーダーの力量 日本を再び、存在感のある国にするために』（PHP 研究所、2010 年 11 月）